

# 描画体験に基づくバウムテストの包冠線と枝の解釈 仮説の理論的基礎づけ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥田, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4417">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4417</a>

# 描画体験に基づくバウムテストの包冠線と枝の解釈仮説の理論的基礎づけ

学芸学部 心理学科 奥田 亮

**要旨：**本研究の目的は、バウムテストにおいて、その描画体験から解釈仮説の理論的基礎づけを行うことである。特に本稿では、包冠線（樹冠の輪郭線）と枝を中心に、自らの描画時の体験を省察してそれを論じた。その結果、包冠線の描画体験には、外界と自己とのせめぎ合いから生じる相互作用の体験というテーマが反映されていると考えられた。すなわちそれは、幹と樹冠とのしっくりくるバランスを実現しながら紙面に収めなければならない、という課題であり、それが「自他の境界・領域」を作ることでありとも考えられた。枝の描画体験については、幹から「生長していくエネルギーを方向付ける」中で、自己をどのように展開して形にしていくかという点が、一線枝と二線枝で異なることなどから述べられた。そして、解釈に関する諸テキストや先行研究の結果を概観し、上記のような包冠線と枝の描画体験の省察から、解釈仮説を根拠づけることが妥当であり、それによって臨床的に応用性の高い解釈となることを論じた。

**キーワード：**バウムテスト、描画体験、包冠線、枝、解釈仮説

## 1. 問題と目的

バウムテストは日本の心理臨床現場で用いられることの多い心理査定技法のひとつであり、これまで膨大な数の調査や事例研究がなされてきている（佐渡，2011；平田ら，2017）。しかしそれらの研究では、解釈を体系的に記した様々なテキスト（例えば，Koch，1957/2010）に準拠して、描画を含む諸データが検討され、最終的に研究の結果の是非を諸テキストの解釈にあてはめて判断することになりがちであり、そうすると CI の内面や体験を実感してイメージしながら理解できる研究がどうしても少なくなってしまう。これは、解釈のテキストにおいて、バウム（以下、バウムテストあるいは樹木画テストで描かれる木をバウムと呼ぶ）を描くことでどのような描画体験が起こっているのかに関して、基礎理論的にまとまってほとんど述べられていないことが一因と考えられる。

このような問題意識の下、筆者はこれまでバウムの描画体験過程を省察し、バウムテストの解釈仮説に、被検者が木を描く体験という視点を織り込んでいくための理論的な基礎づけを行うことを目的として、研究を行ってきた（奥田，2005；奥田，2012；奥田 2018）。そして、奥田（2019）において、バウムの幹の描画体験に焦点をあて、バウムが描かれるプロセスを筆者自身で辿りながら、そこで起こる体験を内省し記述し、

様々な文献や実証的研究に照らし合わせて、内省された体験の妥当性について検証した。その際、描画の基礎体験として「痕跡を生み出すこと」「形をとること」「形への自己投映」があることを指摘した。「痕跡を生み出すこと」とは、絵を描くために「鉛筆を紙に押しつけて動かし、線を生み出す」際に、「描画者が線を描く心地よさに従って、その気持ちのままに描線を伸ばしていこうとすること、それによって自らが描いた証しが残っていくこと」と定義される。これは「描画（描線を引くこと）の基礎的行為・体験であり、身体・運動感覚的で、あまり自覚されないという意味ではかなり無意識的な心の動き」であり、「線を生み出す行為主体としての自己感覚体験を伴うため、それが高じるとしばしば情動的な開放感が生じる」ような体験要素である。一方「形をとること」は、描画として「何らかの形・輪郭を紙面に描く際に「運筆をコントロールしながら、意図した何らかの形を描き出すこと」である。この体験は「より意識的であり、表象・視覚協応操作的に『形にしよう』とする自我の関与がある」と考えられる。さらに「形への自己投映」とは、『形をとろう』とする時、その形を思い浮かべ、紙面に予見することが必要となるが、その過程で、描かれた形に自己を重ね見出す」体験のことである。

奥田（2019）では、これら描画行為の基礎的な3つ

の体験要素を基にして、幹が描かれていく過程（バウムを描き出す位置、側線によって幹の長さ・幅を決める過程、それらが描かれる中で生じている体験）を省察し、先行研究の知見と実例を踏まえながら、バウムテストの諸テキストにおいて述べられている幹に関わる解釈仮説は、その体験過程によって基礎づけられることを示した。

本研究は、奥田（2019）に引き続き、バウムの樹冠部（包冠線と枝）の描画体験過程に注目して、その体験過程と解釈について検討することを目的とする<sup>1)</sup>。なお本研究では、バウムテストだけでなく樹木画テストに関する諸研究やテキストも含めて検討する<sup>2)</sup>。

## II. 包冠線と枝の描画体験および解釈仮説・諸研究

### 1. 包冠線を描く体験

#### 1) 境界と領域を作ること

包冠線とは、山中康裕が提唱した表現で（山中, 2003）、樹冠部を包む輪郭線を指す<sup>3)</sup>。包冠線を描くことは、言い換えれば、樹冠部の「形をとること」であり、樹冠部のおおよそのイメージを、実線で形にしていくプロセスである。現実には樹木の樹冠は、枝や葉などの集合体によって形成されており、明確な輪郭を持つわけではないため、描かれた包冠線は仮想された（実際にはありえない）輪郭である（奥田, 2005）。

まずは具体的に、包冠線を描くプロセスについて考えてみよう。多くの場合、すでに描かれた幹の上部付近を始点とし、樹冠部の輪郭（＝包冠）が形作られていく（図1）。この描線を描いていく体験やその過程には、いくつかの要素が含まれていると考えられる。

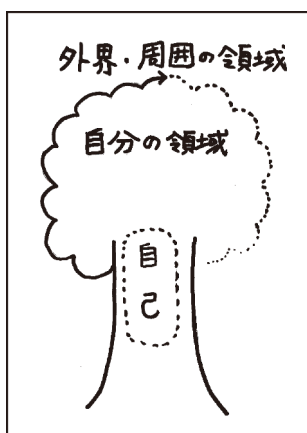


図1 包冠線を描くこと

ことさらこの「自他の境界・自分の領域を作り出すこと」という要素が大きいと考えられる。それは、空間象徴的に（描画者の空間イメージとして）樹冠部を展

まず、包冠線を描くことで、樹冠部（バウム）と外界との境界が明示されていくことになる。線の内側がバウム・樹冠の領域であり、線を引くことでその領域が作り出される。もちろん、この要素は樹冠部だけではなく、幹や根を描くときにも言えることであるが、包冠線の描画においては、

開かせていく紙面の上部領域が、バウムにとって「外界」のイメージが強く働いたためであろう（例えば松下, 1999）。そこには基点としての「幹」への同一化（自分が描いた幹という形への「自己投映」、幹に自己を重ねる感覚；奥田, 2019）があることも重要である。

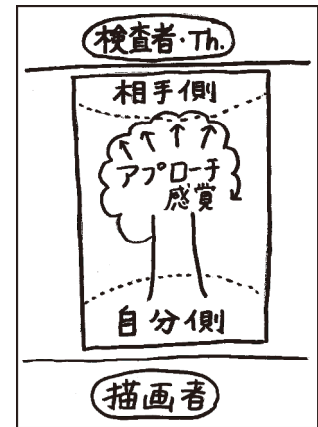


図2 描画時の位置関係

加えて、実際の描画場面の対人的要素もある。バウムテストを描く時の位置関係は、描画者が紙面の手前側に座り、紙面の上辺の向こう側に検査者やセラピストがいる、ということが多い。すると、樹冠部を広げていくその先に、他者（検査者等）がいることになる（図2）。そういった描画場面での位置関係（によって生じる他者意識）から、上方への展開が相手にアプローチするイメージを引き起こすことに貢献している面もあるかもしれない。

このように、包冠線で樹冠の領域を作り出す（確保・拡大する）ことは、「私をどの程度（紙面・空間の中で／外界・周囲に対して）拡げていくか／出していくか」につながる。よって、包冠線を描く体験は、社会的・対人関係的な拡大志向性や積極性、野心などの感覚とつながり得るのだ、と考えられる（奥田, 2005）。あるいは逆に、窮屈そうな包冠線を描くことで、外界・他者からの圧迫感・抑制感も表される。時には自分を防御するラインとして描かれるような包冠線の意味合いもあるだろう。硬い単線による円・楕円形の包冠線を描く感覚は、外界に対する防衛線（柵・壁）を作る感覚に近い（図5の右下のバウム参照）。

#### 2) 幹とのバランスと紙面に収める／はみ出すこと

樹冠を描く際、幹との大きさのバランス感覚が働きうる。実際に包冠線を描く過程を、色々なバウムをなぞりつつ追体験的に探ってみると、どこかしら「この幹の大きさ（高さ・太さ）だと、樹冠

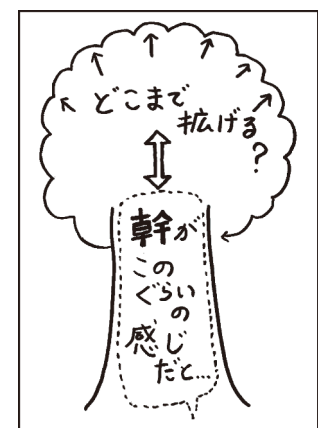


図3 幹と樹冠のバランス

の大きさ・形はこれぐらいかな」という意識が起こることが実感される(図3)。そして、その意識の強さや希薄さには個人差があるであろう。時には、描いている際にバランスを意識しなかったのか、描き終わってから「バランスが悪い絵になった」と描画者が述懐する事例に遭遇することもある。その時は、バランスを取ることも、他の要素(例えば「痕跡を生み出すこと」や、樹冠領域の拡大、等)が描画者に優先されて意識されているのかもしれない。あるいは、傍目には樹冠が大きすぎる・小さすぎるように思っても、描画者にはその大きさがしっくりくる場合もあるであろう。それらは、「私」のポテンシャル(幹の大きさ・しかりさ)に比して、どこまで樹冠部の領域を拡大するか(領域を拡げていく描線を生み出す興奮に身を任せきることなく、幹に見合った「形をとる」こと、でもある)について、描画者がどのように感じているかを反映すると考えられる。

ところで、幹とのバランスを含めてしっくりくる大きさで包冠線を描こうとする時、場合によっては、樹冠部が紙面へ収まらないぐらいの大きさになってしまう、すなわち「紙面から枠外へのはみ出し」(図4)が起こる状況が生じてしまう(藤中, 2008等)。この状況で、描画者は

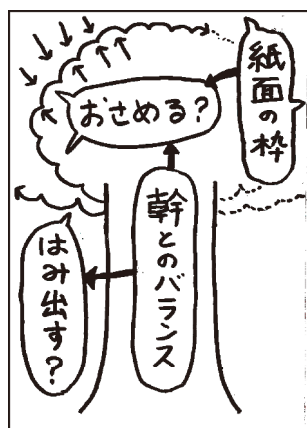


図4 枠外へのはみ出し

“枠に収める(守る)”ことに則ろうとする意識と、“自己(のしっくりくる樹冠部バランス)感の優先”欲求との葛藤に遭遇することになる。そして、あくまで“枠に収める”ために樹冠部(包冠線)を縮小したり、ややいびつになったりしながら紙面に沿って包冠線を描くような抑制傾向を示す描画者がいる一方、自分の思い描く樹冠部の大きさイメージを優先し、時には積極的に枠を“はみ出そう”とする欲求の下に、包冠線が紙面に収まらないようなバウムを描く描画者もいる。これらの傾向が、社会的ルールや何らかの枠組みに対する態度とつながっている可能性は考えられるだろう。

### 3) 外界と自己とのせめぎ合い

このように描画体験を検討してみると、全体として、包冠線を描く際には、外界と自己とのせめぎ合いとい

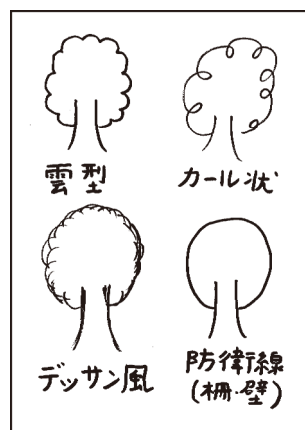


図5 様々な包冠線

うテーマ(拡大欲求や自己顕示欲求、周囲に対する防衛的態度、外界からの規制や枠組みへの葛藤)が体験されやすい、と考えられる。それらを感じながら描かれるのが、包冠線の基本的な描画体験だと言えよう<sup>4)</sup>。なお、様々な包冠線の描かれ方について、例えば雲形の樹冠のようなモクモクとした描線(アーケード冠)、クルクルと小円を作るようなカールした描線、デッサンのような細かな線を重ねる描き方、等々にも、それぞれ描画者の感覚や体験が想定できるかもしれない(図5)。例えば雲形の包冠には、半円形を均等に生み出すリズムとコントロール感から、生き生きとした「痕跡を生み出す」動きと適度の統制感を見て取ることもできるであろう。細かな破線を重ねるような輪郭のタッチは、自他の境界面を形成する際の慎重さや葛藤・不安感があるのかもしれない(ちなみにKoch(1957/2010)には、樹冠の内部を含めてカール状の線やもつれた線で描かれた樹冠の例とそれを描く体験について記述している部分がある)。

以上は、幹の次に包冠線を描く、という展開を想定したものであるが、もし先に樹冠内部(枝や実)が描かれた場合、包冠線は「包む」(内部を保護する・境界を作る)体験を、より顕著に含むかもしれない。

## 2. 包冠線(樹冠部)の解釈仮説と実証研究

### 1) 諸テキストにおける包冠線(樹冠部)の解釈仮説

ここまで、包冠線の描画体験を検討してきた。では、バウムテストや樹木画テストに関する諸テキストにおいて、包冠線の形成に関わる解釈仮説はどのように述べられているのであろうか。それらでは、包冠線(樹冠部の輪郭)のみを取り上げて述べられることはあまり多くなく、樹冠部全体として、その象徴するものや解釈が基本的に描かれているが、包冠線と関連すると考えられる記述を以下に抽出してみる。

まずKoch(1957/2010)は「樹冠の外層部分は、周囲の環境との接触領域を構成し、内的なものとの外的なものとが相互に関係する領域、新陳代謝や呼吸の領域である」としている。Bolander(1977/1999)は、樹木画テストに関するテキストの中で、「樹冠には、人間関係(家族、親しい人びと、社会的な関係)への

意識された態度と、環境全体との関係への構えが表現されている。樹冠には被検者の精神的・知的発達、興味の範囲、目標の性質、満足の対象が描かれている」と述べている。Fernandez (2005/2006)<sup>5)</sup>は「樹冠の輪郭は、人が周囲とどのように接し、周囲からどのように情報を集め、対外的にどのように振舞っているか、どのように感じているかを示している」と記している。高橋・高橋 (2010) は樹木画に関して「樹冠は①目標、理想、興味などとそれに関する自尊心や自己評価、②内的衝動や感情を統制する理性や精神生活 (空想生活)、③家族、友人、社会等の人間関係への意識的な態度等を象徴することが多い」としている。

これらをまとめると、諸テキストにおいて樹冠部やその輪郭 (包冠線) は主に「周囲の人々・環境・社会との関わり・態度」あるいは「目標・興味・関心」等を表すとされていると言えよう。前者は空間的・社会的、後者は時間的・志向的な意味で「私を上げ (展開) ていくこと」と関連している。すなわち、これらの解釈のベースには、先に考察した包冠線の描画体験があることが十分想定できるのである。バウムテストの包冠線や樹冠部を解釈する際には、直ぐに「対人関係」「目標」といった言葉で概念化するのではなく、本論で述べているような「自分をどう展開していくのか」の感覚をイメージする姿勢が、より共感的で応用性の高い解釈に繋がるのではないだろうか。

## 2) 包冠線 (樹冠部) に関する実証研究

次に、バウムの包冠線や樹冠部の解釈・理解について、事例や調査等で実証的に検討された様々な研究を取り上げ、そこで示された結果を見ていく<sup>6)</sup>。先行研究の多くは、解釈のテキストと同様、包冠線というよりも「樹冠」に関して調べられたり言及されたりしていることが多く、必ずしも包冠線に関連する特徴とは限らない可能性もあることを断っておく (この点に関しては、のちに留意事項として言及する)。その上で、以下に諸研究を概観した時に、ある程度共通した結果が示されている研究を挙げ、それらを上記の描画体験による仮説と照らし合せつつ考察していくことにする。①まず、樹冠の高さや幅と心理的特徴との関連性を報告している調査研究をいくつか挙げるができる。例えば村瀬 (2011) は、樹冠の適度な高さや幅が、社会的スキルの幾つかの側面 (人と気軽に関わる力である「初歩的スキル」や対人的な「関係調整スキル」等) と関連することを明らかにしている。清水ら (2014) では、樹冠の面積・縦幅・横幅の大きさと対人恐怖性の低さ・誇大的自己愛傾向の高さが関連しているこ

とを示している。齊藤ら (2013) や齊藤 (2014, 2015) は様々な質問紙とバウムテストの関連性を検討し、樹冠の高さは YG 性格検査の「支配性」、Big5 の「開放性」、自己愛人格目録の「優越・有能感」等と、樹冠の幅は Big5 の「外向性」、自己愛人格目録の「優越・有能感」等と関連することを報告している。これらの多くは、他者との関係に関わる個人特性と樹冠部の大きさとの関連性を示したものである。

また、心理的な治療効果や回復に伴って、樹冠の拡大や豊かさが生じるという事例報告が複数ある (津田, 1994; 永田, 2003; 椋田ら, 2005)。調査研究でも、バウムの樹冠の高さと幅 (の小ささ) が GHQ の「不安・不眠」「社会的活動障害」「うつ傾向」「神経症傾向」を予測するという結果 (加曾利, 2004)、抑うつが低い群は樹冠幅が広いという結果 (滑川ら, 2017) 等が示されている。中には、樹冠の大きさと SDS (抑うつ傾向) や STAI (不安) との関連が示されなかった研究 (佐々木ら, 2010) もあるが、全体的には、「樹冠部を大きく描くこと」と、「心理的な健康さ・自分に対する有能感や“できる”感覚を持ちながら、対人的な積極性や拡張志向性を発揮すること」との関連性を示唆する研究結果が多く見られる。この一連の結果から、やはり包冠線の描画体験に外界への自己の展開感覚が含まれていると想定して解釈を行なうことの妥当性が示されていると考えられる。またそれと同時に、包冠線の拡大の根底には「いける、どんどんいこう!」といった自分に対する自信や不安の低さが内在していることが、上記の先行研究群から推察される。②樹冠の高さと幹の高さの比率については、Koch (1957/2010) で示されたように、発達に従って幹の高さ優位から樹冠の高さ優位へと変わっていく (ただし老年期には幹の高さ優位に戻っていく) ことが、多くの研究によって確認されている (一谷ら, 1986; 山下, 1982; 小林, 1990; 桑代ら, 2001)。これは文化の異なる海外でも普遍的に見られる現象であることも報告されている (濱野ら, 2007)。このような変化が起こる理由として、発達に伴う社会的関係の拡大が樹冠部に反映されている、という論がある (石川, 2015 等)。幼児期～児童期にかけては、自己の中心としての「幹」に力点があるが、青年期・成人期には他者との関係を象徴する「樹冠」に力点に移る、という考えであり、これも本論文の包冠線の描画体験の考察に一致する見解と言えよう。

③普遍的な現象としても一つ、年齢や描画回数、知的障害の有無等に関わらず、一般に樹冠はその左右比

が10:11(右がやや大きい)になるように描かれる、という結果が、幾つかの研究で示されている(Koch, 1957/2010; 山下 1982; 原ら, 1998; ただし自閉症者に左右比が等しいバウムが現れることがある、という報告もある)。このような樹冠部の左右比が生じることには、バウムの位置との関係(バウムは中央よりやや左の位置に描かれる傾向がある。例えば一谷(1989)等)、空間象徴との関連性なども考えられ、容易には断定できないが、包冠線の描画プロセスから考えるのであれば、一般に日本では丸(円弧)を描くときに時計回りに描くことが多いため、包冠線を描く中で後半(樹冠の頂点から右側)になって、より広げて描きやすい何らかの要因が働いている可能性がある、と言えるであろう。これについては、もう少し関連する研究やデータをより詳しく検討する必要がある。

④ここで、「包冠線を描くことが心理的にどのような意味合いを持つのか」について、示唆を与えるような研究を幾つか挙げたい。

沼田(2016)は、枠づけ法によってバウムを描くことで、精神障害者のバウムにおける包冠線の出現頻度が高まったことを報告し、枠づけによる保護作用と圧力作用から内的エネルギーが統制されて包冠線が表現された、と考察している。換言すれば、枠線の保護と圧力によって表出されるような、「自分はこうだ」というような主張の態度が、包冠線を引く行為に含まれているのだと考えられる。

一方、田上ら(2012)や森田ら(2012)によって試みられている「樹冠除去法」(包冠線が描かれたときに、包冠線を描かないで再度バウムを描くように求める方法)の研究では、包冠線を除くことによって描き手に緊張や不安が高まること、精神障害者(特に統合失調症者)は幹に対する樹冠の高さの比が小さくなる(樹冠部の収縮)こと、を見出している。あるいは谷本ら(2012)は、学生に「遊びのつもりで気楽に」バウムを描くように求めると、単調なアーケード型の包冠線が出現するパターンが見られることを報告している。これらは、包冠線を描くことが、樹冠部を詳細に描くこと(より具体的には、幹先端処理にコミットして、枝の分化に取り組むこと)を回避するための、ある種の覆いや護りとして機能することを想像させる。

ところで、幹と樹冠とのバランスや樹冠のはみ出しについて、先に描画体験から考察したが、佐渡(2015)によれば、紙面からはみ出しは紙のサイズ(A4とB5)によって変化せず、紙面という「枠に収めること」は、個人内要因が一定働いているようである。枠

からはみ出るのが包冠線だけとは限らないが、この結果は、幹を描いて包冠線を描くときに紙面からはみ出すか否かが、紙面の都合(「紙が小さかったからはみ出しちゃった」)だけではなく、あくまでその個人の与えられた枠組みへの態度(「出ちゃだめだ」や「はみ出しちゃえ」等)を反映していることを示唆する。⑥包冠線の描画体験に関わる研究の概観の最後に、幾つか留意すべきと思われる点を記す。

福住ら(2011)は高齢者に「木を一本」あるいは「実のなる木を一本」描くように求めたところ、教示の違いによって描かれる樹種が異なり(「実のなる木」で柿の木が多く描かれた)、その結果後者の教示では包冠線が描かれにくくなったことを報告している。このことは、単純に「包冠線を描いた/描かなかった」だけで、描画者の心理傾向を推測することには慎重であるべきことを示している。

包冠線がどのような形状や描かれ方をしているか、についても、解釈のテキストのように、雲形、円形、角形等々が特定の心理的傾向を意味することが、複数の調査によって一致して示されているようなことは、あまり見受けられない。例えば岩川ら(1993)は5・6歳児において「雲形樹冠」が、社会性の発達良好群に多いことを報告しているが、他に「雲形樹冠」が適応的であることを示した調査研究は、筆者の現在入手している論文内では見当たらなかった。引き続き先行研究を調べる必要があるものの、細かな包冠線の描き方が、即座に描画者のある特徴を意味する、という解釈の仕方は、必ずしも妥当性の高いものではないと、現段階では思われる。

そして、再度記すが、これまで記してきた「樹冠」に関わる調査結果は、その全てが「包冠線」に読み替えられるものではない。本論文における「包冠線の描画体験による解釈仮説の基礎づけ」を裏付けるためには、今後はより限定した「包冠線」に関する研究を行っていく必要があるであろう。

### 3. 枝を描く体験

#### 1) 方向づけて展開しながら形にしていくこと

今度は、樹冠を構成するもう一つの重要な要素である枝について検討する。幹先端から枝を伸ばす動きを、奥田(2005)では幹先端処理の一形式である「分化」と呼んだ。「分化」は、『私』感を含む「幹」という基点から「生長していくエネルギーを方向付ける」感覚を含んでいる。二線枝であれば、枝の太さという「形をとり」つつ「伸びる動き(産出感)」をそこに内包させている。端的に表現すれば、「私を展開しながら、

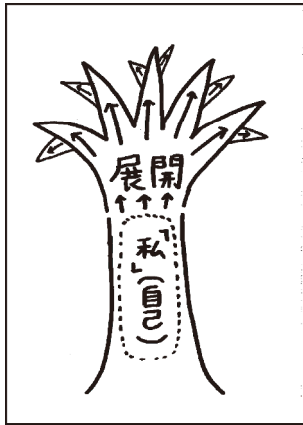


図6 枝を描く体験

も樹冠の一部であるという点で、これらの体験が共通していると考えられるのであるが、包冠線は境界面の確定（すなわち外界や他へに対する私のありようという意識の強さ）に重みがあるのに対し、枝や分化は幹から展開していくこと、「私をどうしていくか」という側面が強調されるという違いがある。つまり枝を描くことは、包冠線を描くことに比べて、外に対する意識よりも即自的な感覚を含むと考えられる（奥田，2005；山川，2005）。

## 2) 一線枝と二線枝・方向性の思索と構造化

ただし枝という「形にしていく」ことに関しては、一線枝であるか二線枝であるかによって、随分体験が異なる（図7）。二線枝を描こうとすると、枝を形成するための片側の線を描きながら、残りの（もう一方の）線を描くまで、枝の形の確定が留保される。ほどよい太さや長さの枝を描くためには、枝を描き終えるまで一定の枝（の伸長する）イメージを維持する必要がある。そこでは、幹から伸びる感覚を保持しつつ「形をとること」というコントロール感が重要となる。しかし一線枝の場合は、線を伸ばすことが直ぐに枝の

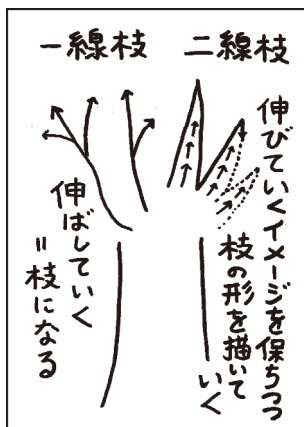


図7 一線枝と二線枝

形にしていく」体験と言える（図6）。

ここで、包冠線と枝の違いについて述べておきたい。既に包冠線を描く体験が「私を拡げ（展開）していくこと」とつながることを述べたが、枝の描画体験もまた「私を展開しながら形にしていく」と記した。いずれ

も樹冠の一部であるという点で、これらの体験が共通していると考えられるのであるが、包冠線は境界面の確定（すなわち外界や他へに対する私のありようという意識の強さ）に重みがあるのに対し、枝や分化は幹から展開していくこと、「私をどうしていくか」という側面が強調されるという違いがある。つまり枝を描くことは、包冠線を描くことに比べて、外に対する意識よりも即自的な感覚を含むと考えられる（奥田，2005；山川，2005）。

形形成となるため、「痕跡を生み出すこと」がそのまま枝の成長に直結することになる。

また、包冠線の“領域の拡大”と異なり、枝は直線または曲線的に外へと展開する。それは一定の方向性、ある方向へ進んでいこうという「志向性 orientation」の感覚を、その描画体験過程に含ん

でいる。時には「どのように進もうか」と逡巡し、考え、試行錯誤することもあるであろう。様々な枝の伸ばし方が複雑になるほど、樹冠部を枝で構造化させるための全体的な見通しが必要となる。構造化があまりに形式的で整い過ぎると、統合失調症で見られるような図式的・記号的なバウムにもなりかねない。このように、枝の形成には、考えながら道筋を作っていく「思索の道程」のような感覚と、その結果としての自己表現の展開があると言えよう。

## 3) 幹の側面から出る枝

ここまで枝の描画体験について述べてきたが、枝の分かれ方には幾つかのパターンがある。有名なのは、藤岡ら（1971）の幹先端処理に関わる類型であり、これまで想定していたのは、彼らの分類のうちの放散型（幹先端から複数の分枝を行うタイプ）の枝分かれであった。他の類型として、基本型や人型のような、幹の側面から両側に枝が突き出るタイプのバウムもある（図8）。Koch（1957/2010）のモミ型のバウムも含めて、枝が幹の横から生えてくるように描かれる場合の描画体験は、どのようなものであろうか。たとえ幹の

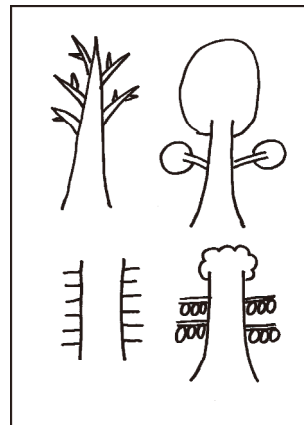


図8 横に突き出る枝

側面から出ていたとしても、幹という基点から何がしかを展開させる体験は伴っているように思われる。ただ、電柱状に枝を横に毛や翼のように生やしていく場合（いわゆる水平枝、特に一線枝の時；図8下部のバウム）、「自分をどのように展開させるか」といった模索感はあまり含まれ

ておらず、「生やす」感がより優位であるように思われる（これは「痕跡を生み出すこと」につながる）。こういった枝には、実や葉が付くことが多い印象があるが、その表現も「生えてくる」感覚という点で一致する（図8右下）。このような、横に枝が突き出て「生える」描き方（時に退行指標と見なされる）には、私から何か生み出しはするけれども、外界を意識しながら生み出すものを構造化して展開させるまでに至らない感覚が、基底にあるように思われる。

なお、包冠線との描画順の前後は、枝においても留意すべき点である。包冠線の後に枝を描く感覚は、樹冠内の領域を「埋める」「張り巡らす」、時には「装飾

する」感覚を含み得ると考えられる。

#### 4. 枝の解釈仮説と実証研究

##### 1) 解釈の諸テキストにおける枝の解釈仮説

包冠線と同様に、枝に関する諸テキストの記述を、以下に引用する。

Koch (1957/2010) は、枝は幹と並んで「実質〔中身〕を構成する」が、樹冠の外層部分で「洗練され」豊かで細かに枝分かれし、繊細な感受性が表現されると記している。特に幹に近い部分の枝は素質を表す、と考えているようである。Fernandez (2005/2006) では、「枝は、精神状態、環境との相互作用を象徴的に表現しているかもしれない。枝は、環境に対して接触し『枝が向かい』『願望の志向性』を示す」とされている。Bolander (1977/1999) では、「一般に枝はエネルギーが流れて樹冠のさまざまな部分に配分される通路を象徴している。そして、上の枝は、思考の流れ、思考様式、創造性、表現、特殊な才能、目標、傾向、自己表現の仕方を表すが、下の方の枝は生活史での経験や人間関係を含む態度を表現する」、「否定的な側面として枝はまた、他者との関係の仕方として、逃避傾向、欲求不満や阻害の指標、あるいは敵意や攻撃性のサインも示される」としている。さらに「一般に枝は人が環境から流入するエネルギーを受けとる通り道を表し、また、幹から樹冠に配分されるエネルギーの通り道を表している。枝はまた思考様式や創造的な自己表現の様式を示している。」と述べている。高橋・高橋 (2010) は「枝は樹冠を形成する部分であり、樹冠と同じように①目標や理想の方向、②家族、友人、社会などの人間関係での相互作用、③外界と内界との精神的交流の円滑さ、④環境から満足を得る可能性などを象徴している」としている。

以上を概観すると、枝の解釈は、「他者や外界との関係の仕方」という面で、樹冠（包冠線）とある程度共通しているが、「願望や理想の方向性・志向性」「エネルギーの流れ」「思考の仕方・様式」という側面も含まれる。これらは、枝の描画体験で述べた内容とつながるものである。一方、枝の描画体験の検討段階では想定していなかった「環境からの流入、受け取り」というニュアンスも、幾つかのテキストの解釈において見られる。確かに、幹側から枝を伸ばす描き方ではなく、外から幹に向かうような描き方の場合には、この「環境から流入」感はあるかもしれない。Bolanderのテキストでは、枝が樹木において葉を通じた養分の流入部という象徴的イメージがあることから、このような解釈がなされるのかもしれないが、描画体験に基

づくなら、枝が描かれる時の運筆の向きによって、その解釈の妥当性が左右されるようにも思われる。

##### 2) 枝に関する実証研究

枝に関する調査研究や事例研究で、何がしかの心理的特徴との関連性を報告しているものは、比較的多く見られ、包冠線と共通する内容もあるが、枝という部分・指標で特徴的に見出されているような傾向もある。①枝に関わって特に調査研究の指標として用いられ、描画者の特徴との関連が繰り返し示唆されているのが、「枝の有／無」「枝（主枝）の数」と「一線枝／二線枝」である。それらの研究の対象者として取り上げられているのは、精神・身体的な病いや環境への適応に問題を抱えている者、加齢や認知的機能の低下が進行した高齢者などで、特に統合失調症者と高齢者の研究が多い（森田，1994；森田ら，1998；稲富ら，1999；横田ら，1999；小林，1990；坂口ら，2005；坂口ら，2006，他）が、心気症者（菅，1976）、不登校経験成人（桑代ら，2002）、非行児・登校拒否児で問題が改善しなかった群（一谷ら，1984）、甲状腺機能低下症者（金山ら，2016）等の研究もある。そして、問題や病いを抱えている群・高齢者の方に、総じて「枝がない」「主枝が少ない」「二線枝が少なく、一線枝が多い」傾向が見られている。加曾利（2004）が大学生を対象としてGHQの下位尺度と主枝数の少なさが関連していることを報告しているのも、同様の傾向と言えるであろう。臨床事例でも、面接や療法の展開に伴って枝が出現・増加したり、二線枝が増えたりする報告が多数見られる（椋田ら，2005；中村，1977；上倉，2013；津田，1994；稲富ら，1996，稲富ら，1998）。

一方で、健常者（大学生）を対象とした、いわゆる個人特性とバウムとの関連性を統計的に検討した調査研究においては、枝の指標に関して有意な結果は病者や高齢者との比較研究に比べると豊富ではなく、とりわけ樹冠や包冠線で見られたような対人関係や社会性との関連を指摘する研究は多くない。筆者が概観した中では、斉藤（2014）がBig5の「開放性」と主枝の本数の関連性を、田中（2015）が動的学校画で描かれたコミュニケーションレベルと「上向きの枝」「枝先鋭」「先が太くなる枝」の関連性を示唆したぐらいである。網島（1992）がYG性格検査とバウムテストを女子短大生に実施した研究で「枝」について関連が見られたのは、「劣等感」と「枝なし」、「回帰性傾向」と「一線枝」であり、いずれも対人関係に関する傾向というよりは、個人内の情緒的問題と枝の表現に関するものである。そして、健常者（大学生など）では全



体として枝によってその心理的特徴が一定の傾向をもって示されることがあまり見受けられないのに対して、病者や高齢者の特徴が枝の貧弱さに投映される傾向があることは、興味深い。

その原因の一つは、枝の描画体験の考察で述べたように、枝（特に幹先端からの主枝）を描くには、包冠線のように外界・他者を意識して形作ることよりも、本体である幹を分化させるだけの力が必要であることが関係していると考えられる。枝のない状態から（一線枝であっても）枝を伸ばすことは、幹から何がしかを展開させよう・生み出そうという心の動き・エネルギーが心理的に起こっている表れであろう。なおかつそれを二線枝にするには、先述のように、枝の伸び・方向づけを思い描きながら、形を描いていくという2つの描画行為に含まれる要素の維持が必要であり、包冠線のように単純に形をとって境界を作り出すよりも複雑な心的動きが生じていると考えられる。一連の研究は、幹（自分）を枝へと分化させることが、問題や病理を抱えた者・高齢者にとってハードルの高い作業であることを示唆しているのではないだろうか。

②上記の考察は、枝を描くことが一定の自我関与を必要とすることを示す幾つかの研究によっても支持される。例えば佐渡（2016）は、バウムを描いた描画者に、再度異なるバウムを描くように指示することで、枝や分枝・分化が増加することを見出し、枝を描くことに「自我の積極的関与」が必要であることを述べている。谷本ら（2012）は、バウムを「できるだけ一生けんめい上手に」描くよう求める教示と「遊びのつもりで気軽に」描くよう教示する条件で実施したところ、後者で枝や分枝が減る描画が生じることを報告している。田上ら（2012）も「樹冠除去法」の研究で、包冠線の除去により統合失調症者のバウムに奇異な枝が現れることを挙げ、枝の描写には「内実とも言えるエネルギーに即してより具体的に自らを探ろうとする過程が反映されているのではないか」と考察している。

③他に、包冠線と異なる特徴として、枝からバウムを描き始める割合は1.0%であり、包冠線（樹冠）の15.2%より断然少ない（佐渡ら、2012）ことも挙げられる。包冠線を描くことは樹冠部エリアの確定であり、それ単体でも樹冠部としてある程度成立するのに対し、枝は幹を前提・基地としてそこからのエネルギーの方向づけ、構造づくりを行うため、まず幹がないと始まらないのであろう。包冠線は幹が（未だ）なくても形成されるが、枝は幹あってこそ現れ得る、という点は、両者の違いを考える上で大きい。ただし「幹+枝」つ

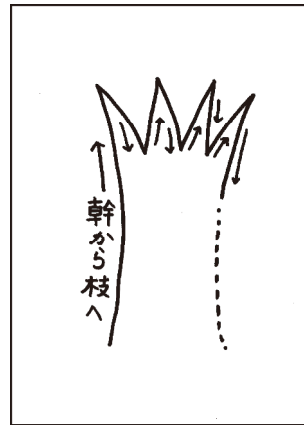


図9 幹+枝を描く例

まり幹と枝を一気に一線で描くパターンは11.1%見られている（佐渡ら、2012；図9）。これが幹を十分予見しながら、枝の形状を統制して、幹+枝の形を作り出していることのアラわれなら、幹を基点として自己を展開する感覚が含まれているかもしれないが、統制される感じがなく一気にならば、ヤシの木型のようにやや爆発的な描出感が起こっている可能性も考えられる。

④何度も述べてきたように、枝は樹冠を構成する要素でもあるため、樹冠・包冠線と共通するような研究結果は一定ある。例えば山下（1983）や沼田ら（2016）の研究で、精神障害者に枠づけ法によるバウムを施行すると、枝あるいは二線枝が増える・分化する、等の変化が樹冠（包冠線）の拡大と共に生じている。場合によっては樹冠に関する研究の結果は部分的には枝に関するものと読み替えることが可能であろう。「樹冠の大きさ」については言えば、包冠線が描かれていないバウムの場合、枝を大きく伸ばして描くことが「樹冠の大きさ」につながるからである<sup>7)</sup>。

⑤これも包冠線と同様に、枝の細かな形状と心理的傾向などとの関連は、研究によって散発的に報告されているにとどまり（例えば統合失調症者で管状枝、直交枝が多い（斉藤，1976）、知的障害を伴うPDDで全枝先直が多い（中鹿，2004）、幼児・児童への心理療法で枝先直が尖状枝に変化した事例（津田，1994）、等）、同じような結果が高い頻度で複数の研究によって報告されているとは言い難い。ただ、管状枝や枝先直、尖状枝など、枝の先端をどう描くかに関する描画体験については、検討する余地がかなりあるように思われる。本稿ではこの点について論じる紙幅が十分なく、また考察するにはより多くの研究にあたる必要もあると考えられるため、今後の課題としたい。

##### 5. 樹冠部の変化しやすさ・影響の受けやすさ

先行研究では、包冠線や枝を含めた樹冠部は状況の影響を受けやすく、変化しやすいと言われている（沼田ら，2016；佐渡，2019等）。また、註7）に述べたように、昔に比べてバウムに枝が描かれなくなり、包冠線が増えているという年代による影響も指摘もされ

ている。これらは、包冠線や枝といった部位を描く際に、「周囲との相互作用」(状況・環境の影響)が生じ、それが描画に反映されやすいことを示唆するものでもあろう。そして時代や文化的影響も踏まえた上で、樹冠部の描かれ方から、描画者が自らの環境や周囲との関係、あるいは描画時の状況や検査者との関係性をどう感じているのかについて理解しようとする視点を持つことが、臨床に役立つバウムの解釈をもたらすのではないだろうか。

### Ⅲ. まとめと今後の課題

以上、包冠線と枝という樹冠部にとって重要な構成要素の描画体験を考え、テキストや先行研究も踏まえて、解釈仮説の基礎づけを試みた。扱った論文や文献は、公表されているものの一部であり、今後さらに先行研究や文献を収集して、検討を重ねていきたい。また、幹・樹冠(包冠線と枝)に続き、根・実・葉・地面線等についても、その描画体験から検討を加えていくことを、今後の課題としたい。

### 付記

本論文は、日本心理臨床学会第37回大会で発表された内容に加筆修正を行ったものである。

### 文献

- 網島啓司(1992)描画テストの基礎的研究—バウム指標とY-G尺度—川崎医療福祉学会誌, 2, 87-96.
- Bolander, K. (1977) *Assessing Personality Through Tree Drawing*. New York: Basic Books. 高橋依子(訳)(1999)樹木画によるパーソナリティの理解 ナカニシヤ出版
- de Castilla, D. (1994) *Le test de L'arbre: Relation humanines et problems actuels*. Paris: Masson. 阿部恵一郎(訳)(2002)バウムテスト活用マニュアル 金剛出版
- Fernandez, L. (2005) *Le test de l'arbre*. Paris: In Press. 阿部恵一郎(訳)(2006)樹木画テストの読みかた 金剛出版
- 藤中隆久(2008)バウムテストを使用した二つの事例研究 心理臨床学研究, 26, 184-192.
- 藤岡喜愛・吉川公雄(1971)人類学的に見たバウムによるイメージの表現 季刊人類学, 2, 3-28.
- 福住昌美・小川将行・岡本 希・車谷典男・岸本年史・佐藤 豪(2011)高齢者を対象としたバウムテ

ストにおける教示の比較研究 心理学研究, 82, 183-188.

- 濱野清志(研究代表)(2007)樹木画テストの発達指標の普遍因子と文化による固有因子の抽出への試み 平成15年~18年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書
- 原 幸一・中西恵美(2000)知的障害を持つ自閉症者のバウムテスト 心理臨床学研究, 18, 390-395.
- 林 勝造(1994)「バウムテスト」論考 臨床描画研究, 9, 3-18.
- 平田直哉・佐渡忠洋・滝浦孝之(2017)日本のバウムテスト文献一覧Ⅱ(補遺・2011~2015年)常葉大学健康プロデュース学部雑誌, 11, 121-133.
- 一谷 彊・西川 満・林 勝造(1984)バウムテストからみた中学生の非行と登校拒否(Ⅱ)京都教育大学紀要, Ser.A, 64, 1-22.
- 一谷 彊・林 勝造・国吉政一・小林敏子・津田浩一・山下真理子(1986)バウムテストによる生涯的発達研究 [I] —樹冠と幹の関係指標の発達の傾向と精神的加齢現象の検討— 京都教育大学紀要, Ser.A, 69, 53-68.
- 一谷 彊・津田浩一・小林敏子・山下真理子・弘田洋二・松井孝史・林 勝造・国吉政一(1989)バウムテストによる生涯的発達研究 [IV] —幹中心部の位置と加齢の関係— 京都教育大学紀要, Ser.A, 75, 1-13.
- 稲富宏之・森田喜一郎・原村耕治・倉田秀明・河村直樹(1996)数量化を用いた作業療法評価の試み—樹木画(バウム)の経時的観察— 作業療法, 15, 351-357.
- 稲富宏之・森田喜一郎・井上ひとみ・中村 桂・原村耕治(1998)1日における作業療法の回数が精神分裂病者に与える影響—3年間にわたるバウムテストによる補助的評価を試みて— 作業療法, 17, 133-142.
- 稲富宏之・田中悟郎・林田博典・太田保之(1999)バウムテストの特徴からみた慢性精神分裂病患者の人格特性—バウムテスト特徴の数量的検討— 長崎大学医療技術短期大学部紀要, 13, 97-101.
- 石川清明(2015)幼児の樹木画テストにおける「樹冠」の解釈について 國學院大學人間開発学研究, 6, 61-72.
- 岩川 淳・岩川真弥(1993)幼児の樹木画の研究(1): 社会性の発達とバウム描画特徴 信愛紀要, 33, 77-84.

- 金山由美・田中美香・河合俊雄・山森（卯月）路子・桑原晴子・梅村高太郎・長谷川千紘・鍛冶まどか・西垣紀子（2016）甲状腺疾患患者のバウムと人格特徴 心理臨床学研究, **33**, 591-601.
- 加曾利岳美（2004）神経症傾向およびうつ傾向のある大学生に見られるバウムテストの特徴—GHQを用いた定量的分析 共栄大学研究論集, **3**, 106-122.
- 小林敏子（1990）バウムテストにみる加齢の研究—生理的加齢とアルツハイマー型痴呆にみられる樹木画の変化の検討— 精神神経学雑誌, **92**, 22-58.
- Koch, K. (1957) *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel* 3. Auflage. Bern: Hans Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男（訳）（2010）バウムテスト [第3版] —心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究— 誠信書房
- 桑代智子・郷間英世・森下 一（2002）不登校を経験した成人の対人関係について—バウムテストによる検討 教育心理学研究, **50**, 345-354.
- 桑代智子・市川雅康・郷間英世（2001）バウムテストに表れる樹冠の形成段階と樹冠の高さに対する幹の高さの比率の加齢に伴う変化 日本教育心理学会総会発表論文集, **43**, 403.
- 松下姫歌（1999）Grünwaldの空間象徴理論に関する基礎的研究—青年期を対象に改良版「置きテスト」と多次元尺度構成法を用いて 甲南大学学生相談室紀要, **7**, 42-53.
- 森田喜一郎（1994）バウムテストに対する経時的数量分析の試みの1例—分裂病症例における不安緊張指標、退行指標の推移— 久留米大学研究論文集, **2**, 8-11.
- 森田喜一郎・中村ひとみ・原村耕治・中村 桂・宮平綾子・倉掛克次（1998）バウムテストの経時的数量化の試み—精神疾患別の評価— 精神科治療学, **13**, 1249-1256.
- 森田喜一郎・五十君啓泰・石井洋平・藤木 僚・小路純央・柳本寛子・内村直尚（2012）バウムテストの樹冠除去法の診断的意義について 久留米医学会雑誌, **75**, 315-323.
- 棕田容世・古宮 昇（2005）バウムテストに見る統合失調症の病理性とその回復過程に関する一考察 大阪経大論集, **56**, 209-217.
- 村瀬浩二（2011）樹木画に投影される社会的スキル—青年後期を対象として 臨床描画研究, **26**, 197-216.
- 永田昌博（2003）バウムテストに見る思春期心身症生徒の回復過程 心理臨床学研究, **21**, 34-44.
- 中村美和子（1977）バウムテストに見られたT子の発達過程 心理測定ジャーナル, **13**, 2-6.
- 中鹿 彰（2004）バウムテストから見た広汎性発達障害の認知特徴 心理臨床学研究, **21**, 611-620.
- 滑川瑞穂・横田正夫（2017）バウムテストの表現に関連する抑うつ症状について 臨床描画研究, **32**, 143-156.
- 沼田和恵, 小林理絵・大館徳子・石井（本多）早由里（2016）精神障害者のバウムテスト枠づけ二枚法からみた「枠」があることの意味 心理臨床学研究, **34**, 27-38.
- 奥田 亮（2005）本研究のねらい 山中康裕・皆藤章・角野善宏（編）バウムの心理臨床 創元社, pp. 144-151.
- 奥田 亮（2012）バウムの描画時における「描出すること」と「形をとること」日本描画テスト・描画療法学会第22回大会抄録集, 50.
- 奥田 亮（2018）バウムの描画に伴うイメージの生起と変容に関する研究 臨床描画研究, **33**, 68-82.
- 奥田 亮（2019）描画体験から考えるバウムテストの幹の解釈に関する理論的基礎づけ 心理臨床学研究, **37**, (印刷中)
- 大場 登（2000）ユングの「ペルソナ」再考—心理療法的接近 創元社.
- 佐渡忠洋（2011）付録 日本のバウムテスト文献一覧（1958～2010年）山中康裕・岸本寛史 コッホのバウムテスト [第三版] を読む 創元社.
- 佐渡忠洋（2016）バウムテストの枝と冠冠線について—否定の教示を用いた調査から 箱庭療法学研究, **29**, 67-75.
- 佐渡忠洋（2019）バウムテストの主題が有する「ゆらぎ」の構造 常葉大学健康プロデュース学部雑誌, **13**, 47-55.
- 佐渡忠洋・岸本寛史・山中康裕（2013）今昔の中学生のバウムテスト表現の検討—1960年代と2010年代との発達指標を通して—明治安田こころの健康財団研究助成論文集, **49**, 77-86.
- 佐渡忠洋・松本香奈（2015）用紙の向きとサイズを変えて実施したバウムテストにおける「はみ出し」表現の検討 臨床心理身体運動学研究, **17**, 25-36.
- 佐渡忠洋・鈴木 壯・田中生雅・山本眞由美（2012）バウムの描画プロセスに関する研究：バウムはど

- こから描かれ、幹はどのように構成されるのか  
臨床心理身体運動学研究, 14, 59-68.
- 斉藤和恵 (2014) 大学生の性格傾向や他者意識とバウムテストとの関連 日本教育心理学会第 56 回総会論文集, 487.
- 斉藤和恵 (2015) 大学生の性格傾向や自己愛傾向とバウムテストとの関連 日本教育心理学会第 57 回総会論文集, 689.
- 斉藤和恵・村上弘子・西村詩織・鴛渕るわ・井田博幸 (2013) 現代の大学生の性格傾向や自我状態とバウムテストとの関連 日本教育心理学会第 55 回総会論文集, 381.
- 斉藤通明 (1976) 精神分裂病者のバウム・テスト 心理測定ジャーナル, 12, 11-16.
- 坂口守男・朝井 均・朝井 忠・大家尚文・厩崎いづみ・弓庭喜美子・岡本五百合・志波 充・郭 哲次・篠崎和弘 (2005) 地域在住高齢者のバウムテスト 大阪教育大学紀要 第Ⅲ部門, 53, 83-93.
- 坂口守男・朝井 均・朝井 忠・大家尚文・弓庭喜美子・志波 充・喜志幸子 (2006) 地域在住高齢者のバウムテスト (Ⅳ) —非認知症群における年齢間の比較 大阪教育大学紀要 第Ⅲ部門, 55, 107-116.
- 佐々木めぐみ・横田正夫 (2010) バウムテストにおける抑うつ・不安・攻撃性に関連した描線特徴 日本大学心理学研究, 31, 43-50.
- 清水健司・清水寿代・川邊浩史 (2014) 自己愛傾向と対人恐怖心がバウムテスト指標に及ぼす影響 信州大学人文科学論集, 1, 117-125.
- Stora, R. (1975) *Le test du dessin d'arbre*. Paris: jean-pierre delarge. 阿部恵一郎 (訳) (2011) バウムテスト研究 みすず書房
- Stora, R. (1978) *Le test de l'arbre*. Paris: P.U.F. 阿部恵一郎 (訳) (2018) バウムテスト 金剛出版
- 菅 佐和子 (1976) バウムテストとロールシャッハ・テストによる自己像の検討 心理測定ジャーナル, 12, 19-23.
- 田上雅之・五十君啓泰・宮崎英義・森田喜一郎 (2012) バウムテストにおける樹冠除去法の意義とその発展 九州神経精神医学, 58, 7-13.
- 高橋雅春・高橋依子 (2010) 樹木画テスト 北大路書房
- 田中志帆 (2015) バウムテストと動的学校画—小学生と中学生を対象とした調査から— 人間科学研究, 37, 35-49.
- 谷本泰子・中津達雄 (2012) 樹木画テストに及ぼす自我関与の影響 臨床描画研究, 27, 137-150.
- 津田浩一 (1994) バウムテストと児童臨床—心理治療過程におけるバウムの変化— 臨床描画研究, 9, 41-59.
- 上倉安代・大高基恵子 (2013) 回想法による認知症の人の心理的な変化を追って 心理臨床学研究, 31, 118-128.
- 山川裕樹 (2005) 幹先端処理の重要性 山中康裕・皆藤 章・角野善宏 (編) バウムの心理臨床 創元社, pp. 222-238.
- 山中康裕 (2003) 私のバウムテスト研究の歴史的回顧 岸本寛史 (編) 山中康裕著作集 (5) たましいの形 岩崎学術出版.
- 山下一夫 (1983) バウムテストの臨床的研究—精神科入院患者を対象に— 京都大学教育学部紀要, 29, 184-194.
- 山下真理子 (1982) バウムテストの発達的研究—樹冠と幹の発達の傾向および空間関係の描写について— 教育心理学研究, 30, 287-292.
- 横田正夫・伊藤菜穂子・清水 修 (1999) 精神分裂病患者の彩色樹木画の検討 (第 2 報) 精神医学, 41, 469-476.
- 依田茂久 (2007) 樹木画テストにおける近年の児童の発達状況の変化について 臨床描画研究, 22, 187-210.

## 註

- 1) 幹と樹冠部の描画過程間には幹先端処理のテーマがあるが、これについては奥田 (2005) で既に論じており、本稿はその論考を含めて展開されている。
- 2) バウムテストと樹木画テストは、「実のなる」という文言を入れるか否かという点で基本的に教示が異なり、それによる影響は少なくない (福住ら, 2011) が、包冠線や枝などの部位を描く際の体験を検討する上では、共通して考えられる面が大きいと思われる。そのため、本論文ではバウムテスト・樹木画テスト両方の研究を取りあげる。
- 3) 多くの研究では、樹冠部を形成する輪郭線 (包冠線) を「樹冠」と呼んでいる (例えば、枝や葉は描かれているが包冠線がないことを「樹冠がない」と表現する等) が、本来「樹冠」とは枝や葉や実を含めた樹木の上部全体を指す名称であるので、その言い方は混乱を招きやすい (先の例で言えば、「樹冠がない」というのは、枝も葉も実も描かれていない、

幹から上がすっぽりない、という意味になりかねない)。それゆえ本研究では、基本的に樹冠を包む輪郭線を「包冠線」と呼ぶことにする。

- 4) 樹冠とペルソナとの共通性の指摘（林，1994；奥田，2005）は、本論の考察と、ペルソナが「個の要請と周囲・外界・社会・集合意識からの要請との折り合いとして成立する」（大場，2000）ものと定義されることを考え合わせると、より深く理解できる。
- 5) Fernandez（2005/2006）は Stora（1975/2011，1978/2018）と Castilla（1994/2002）を参照した、としている。それら Stora と Castilla の文献では、包冠線や枝がどのような意味合いを持つかといった基本的な解釈仮説に関してまとまって記述されている箇所が見当たらないが、Fernandez は両文献で列挙されている細かな指標の意味をまとめて、包冠線や枝について記していると考えられるため、ここではそれを引用した。
- 6) はじめに述べたように、バウムテスト（あるいは樹木画テスト）の研究は非常に数多く、佐渡（2011）

と平田ら（2017）の報告に基づく、2015年時点で約1,000件の研究論文や文献（学会誌や大学紀要、報告書などを含む）がある。ここではそれらすべてを網羅して、研究結果を検討することはできていない。筆者がこれまで入手したバウムテストと樹木画テストに関連する様々な文献の中から、研究論文・報告書131本、書籍11冊、学会発表論文集（抄録）21編に基づき、本論に関する内容を適宜取り上げて概観している。

- 7) とは言え、かつて（1970年前後）に比べて、バウムでは枝が減少し、包冠線を描くバウムが多くなっていることが指摘されており（依田，2007；佐渡ら，2013，等），調査研究の多くで対象となっている大学生などの青年期、とくに女子においては、包冠線を描くバウムが多数を占めることを考えると、1990年代以降、少なくとも2000年代に入ってからの研究で青年期をターゲットとしている場合に「樹冠の大きさ」といった指標は、包冠線の大きさをかなり強く反映していると考えてよさそうに思われる。

## **A Theoretical Foundation for Interpretative Hypotheses Based on Experiences of Drawing the Tree-crown-outline and Branches in the Baum Test**

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology  
Akira OKUDA

### **Abstract**

**Abstract:** The aim of this study was to develop a theoretical foundation for interpretative hypotheses based on experiences of drawing in the Baum test. In particular, I present an introspective descriptions of my own drawing experiences, centering on the tree-crown-outline, and on the tree branches in the test. A key theme emerging from this introspection was that of interactive experiences resulting from negotiations with the outer world, which was reflected in the experience of drawing tree-crown-outlines in Baum. That is, my attempts to achieve an ideal balance of the trunk and crown were restricted by the size of the drawing sheet, and could be indicative of boundaries or areas constructed between the self and others. The experience of drawing branches as one line or two lines could indicate different ways of developing and constructing the self by “directing energy to grow” from the trunk. In light of a review of interpretative texts and the findings of previous studies, the interpretative hypothesis derived from these reflective experiences of drawing tree-crown-outlines and branches in the Baum test appear to be appropriate and may contribute to more clinically applicable interpretations.

**Keywords:** Baum test, drawing experience, tree-crown-outline, branch, interpretation hypothesis